

日本気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所	備 考
WCRP シンポジウム	1991年11月26日 ～28日	WCRP 協議会, 東大気 候システムセンター	竹橋会館	Vol. 38, No. 9
第7回北方圏国際シンポ ジウム	1992年2月2日 ～4日	紋別市など	紋別市	Vol. 38, No. 9
中層大気に関する国際シ ンポジウム	1992年3月23日 ～27日	京都大学超高層電波研究 センター	新都ホテル(京都)	Vol. 38, No. 9
International Symposium on GLOBAL CHANGE (IGBP)	1992年3月27日 ～29日	IGBP科学委員会, IGBP 国内委員会, 早稲田大学	早稲田大学	Vol. 38, No. 9
Quardrennial Ozone Symposium	1992年6月4日 ～13日	IAMAP/IOC	アメリカ Virginia 大学	Vol. 38, No. 4
第4回水資源に関するシ ンポジウム	1992年8月3日 ～4日	日本学術会議, 気象学会 など	日本学術会議	Vol. 38, No. 9
日本気象学会 1992年春季大会	1992年5月26日 ～28日	日本気象学会	工業技術院つくば 研究センター(つくば)	
第11回雲と降水に関する 国際会議	1992年8月17日 ～21日	IAMAP/ICCP	カナダモントリオール McGill 大学	Vol. 38, No. 4
第13回ニュークリエーシ ョンと大気エアロゾルに 関する国際会議	1992年8月24日 ～28日	IAMAP, CNA, ICPP	アメリカユタ州ユタ大学	Vol. 38, No. 1

編集後記：この編集後記欄が始まったのは、1985年9月号です。ちょうどこの頃、私は南極昭和基地におり、私の担当する気象ロケット観測、エアロゾルゾンデ観測等が終了しつつあって、約2カ月半のみずほ基地での4名の滞在に向けて、その準備をしていた頃でした。あれからすでに6年が経ちました。その後、色々な機会にお目にかかったり、活躍する姿を目にしたりする気象庁および気象学会の方々の中で、南極経験者が多いのに驚かされます。もっとも、気象庁からの派遣隊員数がのべ150人以上いるという事実をみると、驚くべきことではないのでしょうか。ちなみに、立平良三気象庁長官も、南極地域観測隊第2次隊(1957年10月—1958年4月)で、当時の南極観測船「宗谷」船上での気象観測を担当されました。また、現在の「天気」編集委員の中にも、南極越冬経験者が、私を含めて5人います。今年も例年のごとく11月14日、3代めの南極観測船「しらせ」が晴海埠頭を出港します。それに向けて、現在、第33次隊が準備に追われているところです。今月号が読者に届く頃には、越冬隊員37名、夏隊員16名、計53名を載せた「しらせ」が、洋上を南極へと向かっているはずで、日本夏隊と

して2人目の女性(生物観測担当)が今回参加することになりました。そのうちに、日本隊として初の女性越冬隊員が出てくるかもしれません。日本観測隊のあり方もゆっくり変わらねばなりません。

私が編集委員になってから、約1年が経ちました。最初「会員の広場」欄を担当し、現在は、「海外だより」、「本だな」欄を担当しております。私の担当する原稿は、一読者としての私が興味深くかつ面白く読むものが多いので、「天気」の読者の方にも楽しんでいただけるのではなかろうかと推察しております(もし、そうでなかったら、編集委員失格)。これらの欄充実のために、また、他の欄のためにも、「天気」読者がこれからも自主的に投稿してくださることをお願いします。

(神沢 博)

本誌5月号に掲載致しました「会員の広場」(森広道氏)の内容について、事務局の手違いで訂正前の原稿が印刷され、森氏に御迷惑をお掛け致しました。深くお詫び致します。

(委員長)